

國學院大學學術情報リポジトリ

幕末期水戸藩奥向の文芸に見る志向性

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村上, 瑞木, Murakami, Mizuki メールアドレス: 所属:
URL	https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/2528

論 文 要 旨

学籍番号	203310	氏 名	村上 瑞木
論文題目： 幕末期水戸藩奥向の文芸に見る志向性			
(内容の要旨)			
<p>一般的に近世奥向研究では、武家の妻・妾の制度的・儀礼的な処遇やシステム、特に幕府と大名家の関係に安定性をもたらす機能などが論じられた。江戸城大奥を介した將軍家への内願や、將軍・大名の正室やそれに付随する奥向による政治的動向が明らかにされた。</p> <p>しかし幕末期水戸藩の研究では、奥向の動向がほとんど触れられず、二次史料による断片的記述に限られてきた。その根本原因は奥向関係史料が文芸資料に偏重していた点が挙げられる。</p> <p>また奥向研究でも、奥の女性の文芸活動は「女性の嗜み」とされ、その諸相が打ち消されてきた。先行研究には個別の活動を扱う論考もあるが、奥向機構としての活動を明らかにしたものは管見の限り少ない。</p> <p>以上の問題点から、本稿は幕末期水戸藩奥向の動向の解明を試みるものであり、歴史学研究で考察された和歌と政権との権威的な関わりをもとに論じていく。</p> <p>水戸藩奥向の関係史料は徳川光圀藩主時代と、徳川齊昭藩主時代以降の時期に偏重している。特に後者の時期の藩主一族・奥女中作成の文芸資料が多く確認されるため、本稿では齊昭期以降の奥向の女性が作成した文芸資料を対象とした。</p> <p>はじめに水戸藩奥向の機構を、安政6年12月以降に限定し明らかにした。当該期の特徴は水戸城二ノ丸御殿を中心に奥御殿が構成され、偕楽園好文亭にも奥御殿が存在したなど、重層的かつ大規模な構造が窺えた。</p> <p>次に奥向の女性と水戸歌壇との関わりとして、彼女達の文学的知識形成と奥向で作成された文芸資料の諸相を確認した。ここでは奥女中安島氏立子と和歌の師匠である国学者久米幹文との往来から、教授の特徴や奥向の女性による水戸歌壇との関わりに言及した。</p> <p>後半は奥女中が著述した好文亭滞在記・瑞龍山参詣記など随筆を扱い、強調される権威的な表現や、作中に見られる作者の意図を明らかにした。これらは天狗党の乱や徳川昭武藩主就任など時代的背景を踏まえ、社会変容の中で変わらず残る水戸徳川家と所領との「所縁」を表出し、水戸藩の「理世撫民」政策や、現状の統治の正統性を示す狙いがあったと考察した。</p> <p>このことから、奥向の公的な活動としての文芸は水戸徳川家の統治の正統性を示し、統治機構の安定性を希求することが求められた可能性がある」と結論付けた。</p>			
キーワード (5語)			
水戸藩 水戸歌壇 幕末期 奥向 国学			